

また、直径2.7mの岩盤を割り抜いた素堀の大井戸が確認されました。この井戸については、城絵図にも記されており、本丸御殿に伴う井戸です。昭和4年の鳥羽小学校の建設に伴い、本丸跡は運動場として使用されるため、井戸に蓋がされ、長らく眠ったままになっていました。大井戸については「城山公園の上に二つの古井戸があるが、昔の鳥羽城天守の井戸で、これを雌井戸、雄井戸と謂った。」という伝承があり、この井戸は雄井戸に相当しますが、城の本丸に相応しい立派な井戸です。深さは大正期の記録では45mあったとされていますが、現在は17mまで埋められています。なお、平成23年度から実施してきた発掘調査は一旦終了し、3年分の出土した遺物整理などを進めたくうで、調査成果をまとめた調査報告書の刊行を目指します。



「姿を現した運動場跡の伝説の大井戸」幅2.7mの巨大な井戸です。（※現在は蓋をして埋め戻されています。）

🏺 発掘調査で発見された遺物 🏺



「九鬼時代の軒丸瓦」



「鯨の鱗 (うろこ) 部分の破片」



「内藤氏の家紋「下がり藤」の瓦」



「当時の湯飲みである天目茶碗」

🌟 鳥羽城講演会が行われました

平成25年9月1日には、城郭研究の第一人者である中井均教授（滋賀県立大学）をお迎えして、「鳥羽城を探る―海に向いた水軍の城―」と題して鳥羽商工会議所かもめホールにてご講演いただきました。先生は「鳥羽城は近世城郭の中で、海側に開く大手門を備えた唯一の海城であること、直線的な勾配を残す石垣の形状から文禄年間に築城した城郭を考えるうえで非常に重要」として「城跡を住民が正しく理解し、まちづくりに活かして欲しい」など鳥羽城の重要性についてお話していただきました。



「中井先生の講演風景」



「講演会の様子」

🏯 天守を再現したイルミネーションが点灯！

平成25年12月1日午後6時に、鳥羽城天守閣のイルミネーションが点灯しました。これは、鳥羽ロータリークラブが鳥羽城の存在を市民にアピールするために企画していただきました。高さ9mの鉄パイプの骨組みにLED電球約12,000個が付けられ、天守を形づくりました。ライトアップされた天守は、遠くから見ると浮き上がっているようにみえて、天守が存在していた時のイメージを連想させる見事なものとなりました。イルミネーションは平成26年1月12日まで点灯されました。



「飾り付けの様子」



「現れた鳥羽城天守！」